

「A-Lab Artist Gate 2016」

出演 おかけんた、吾郷佳奈、イスジン、井上理緒奈、
上田優奈、尾崎友哉、山田勇魚
司会 都市魅力創造発信課 松長
日時 平成28年6月18日(土)／午後2時から午後4時
場所 あまらぶアートラボ(A-Lab room1)



おかけんたさん



松長 「Artist Gate 2016」というのは、この春に大学とか大学院、専門学校を卒業された作家さんのグループ展を開こうということで、ここの運営に協力いただいているアドバイザーさん5人に作家さんをご推薦いただきました。ある意味ではこの施設のコンセプトに最も近いような若い人の夢とチャレンジを応援する、一緒に何かを作っていくというような展覧会になっています。

今回7人の作家さんのアーティストトークを開催いたしますが、上田要さんはお仕事の都合で出席できませんでした。今日は6名の作家さんにお越しいただいてますので、色々お話を聞かせていただけたらと思います。進行はアドバイザーの一人、おかけんたさんをお願いしています。

おかけんたさん(以下 おか) みなさん、こんにちは。アドバイザーをしておりますおかけんたです。先ほど松長さんから話が皆さんにあったと思うんですけど、いわゆる今年大学、大学院を卒業されたフレッシュな方々にこちらの場所を提供していただくという事で、関西で初の方もアーティストの方もいらっしゃいます。今回6名の方お越し頂いてるんですけどもちろん上田要さんの作品も皆さんにご紹介していきながら上のアーティストと共に皆さまと一緒に考えていながら楽しんでいただきたいと。まずは吾郷佳奈さん、よろしくをお願いします。

吾郷 佳奈さん(以下 吾郷) 出身校は京都市立芸術大学の美術学部の油画専攻で、春から同じ大学の大学院の絵画専攻に進学してます。

おか 簡単にいうとどんな大学ですか。

吾郷 山の中にある、結構少人数の大学です。

おか 最初大学行った時に自然に囲まれていいなとか何か勉学に励めそうやなとか、そういった印象あったんですか。

吾郷 ボロボロやな一。何しても許されそう。

おか 何しても許されそう。なるほどね。もちろ

んその一番最初に勉強していきながらアトリエ行ったりとか、最初の印象はどうでした？そういう所に足を踏み入れて。

吾郷 入ってみたら森。

おか そういった所で作品制作できるのは環境的には恵まれてますからね。

吾郷 気持ちいい場所ですね。夏も涼しいです。

おか そちらで色々アートを学んでそして実際に油絵に取り組んで4年間、院に進むっていうのはどういった事で。

吾郷 もうちょっと勉強を続けたいなあって思ったのと出身が島根県なので、しばらく京都に居たいなと。

おか ちなみに京芸さんを選んだ理由は何かありますか。

吾郷 学費が安かった。

おか これは重要な事ですよ。吉本もギャラ安いですが、テレビにはたくさん出していただけるというそういう利点があります。大学に入った当時と今現在でアートの取り組み方とか考え方は変わっていくものですか。

吾郷 だいぶ変わったなと思います。油絵専攻に入ったので、油絵の具で描いていけないかと思っていたんですけど、自分のやりたい事に合わせて素材を変えていく事が、柔軟にできるなと思って。

おか 自分の中でこういう素材を使いたい、こういう物やりたいという自由な発想が生まれてきて実際に制作されて、大学内でそういった事は全く大丈夫だったんですか。

吾郷 はい。油画専攻は特に。

おか 吾郷さんの作品でございますけども、倉庫に展示しています。もともとは荷物が置いてあったのですが、なぜここに作品展示を？

吾郷 もともと最初はこの部屋(room1)に展示させていただく予定だったんですけど、暗い所に

置いてみたいというのがあって、倉庫を空けてくださると。

おか まさしく個室ですからね。これはどういう形の作品なんですかね。

吾郷 鏡にペンで、映ってる状態の自分の輪郭線をトレースして重ねた作品です。何体も重ねて描いたのでどんどん密度が高くなって、形がなくなっていく感じがおもしろいなど。暗い部屋にさせていただいて、マーキングの関係で鏡の上に描いていた線が反対側に反射して、ちょっと自分でも思ってた見え方になりました。

おか 今まで実験的にも何も行っていなかった形の手法でしたか。後ろにあるんですけども、ああいう状態の物に反対側からライトを当てて、ライトをあてた物がミラーですから反射して壁の方に投影されてるといふ。人の動きと言いましょか、身体・生体そういったものにも繋がっていくような作品ですね。人々の体の表現は抽象的な人物ですからひとつの形という決まったものはあるんだけど、それを何度も繰り返して動きがあるうちにこういった抽象的な形へと変貌していくのがおもしろいですね。そして影もなんか2つ。先ほどちょっと私作品を拝見しましたがね、歩いて行くと自分の影が浮いていくんですね。いわゆる作家の方が意図としなかった部分が偶然にもその場で起こってしまうことがあるんですね。下の方にも階段をおいた所にも作品がありまして、それはまた狭い階段の横の所ですよ、その所で反対側にまた投影さしてる反射さしてるような形の物で、そこはまたちょっと見え方が違いますよね。角のこういう状態でミラーがあってこっち側に映ってるような。

吾郷 地面にクっつけて反射させたら壁にそって形がゆがんだ感じがおもしろくて、そのままに。

おか 身体・生体の線を描いていくと、動きが出てきたりとか意外性が出てきたりとかそういう発

見的な事がありますよね。

吾郷 今回会期中の土曜日にここで、公開制作という形で、ドローイングしています。向こうの倉庫の作品は鏡に映った自分だけを描いてんですけど、今回そちらでは鏡に映ってる私以外、会場の人であつたりとか、来場くださった皆さんが動いてるところを描いて、今が4回ぐらいの状態です。

おか 今しないとかダメじゃないですか（笑）。ライブ制作といいますが皆さんに見ただけってというのはアーティストとしてどうですか。

吾郷 作ってる所を見ていただける、今回やりたかったのが私以外を描きたかったの、私以外に動きが欲しくて、というのが1つと「何描いてるんですか？」と聞かれて話が始まるのがおもしろいなど。

おか 話が始まってその人が鏡に映った時に描き方が変わったりするんですか？

吾郷 話してるとだんだん近くに来てくれるので、その人が大きくなるので、それを描いたりします

おか 話しても手が止まらない、すごいですね。

吾郷 鏡の中で目は合わせてるつもりなんですけど、傍から見たら無視して絵描いてる人って感じになってるかもしれないです

おか 今回は2スペース、作品を展示されてますが、大学を卒業されて大学院に行って、こちら



吾郷 佳奈さん

の「A-Lab」に提供していかがですか。

吾郷 ありがたい機会をいただいたなと思っています。公開制作というのは結構私にとってハードルが高かったものなので、それも結構軽やかに越えていけたなと思っていて今後につながりそうな気がしています。

おか 続いてはイ スジンさん。イさんは韓国のどちらになりますか、出身は。

イ スジンさん(以下 イ) 仁川(インチョン)で、大学は大阪芸術大学です。

おか 日本に来られたのは美術、芸術を学びたいというのが。

イ 6年半くらい前に初めて日本に来て、大学では、本当に恵まれた時期を過ごしました。韓国でも少し写真を撮っていて、ある程度写真の知識を持って制作活動してから学部に入ったわけなので、他の同期生よりも展覧会に参加する機会が多く、自分の発展にもつながりました。

おか いわゆる韓国の写真のアーティストと日本の写真のアーティストで何か違いってありますか。

イ 個人的な感想ですけど、自分が好きな作家さんは日本の方が多くて、その作品の感性や表現の仕方がすごく好きなんです。どっちかっていうと韓国はちょっとドキュメンタリーの影響が大きい気がします。(韓国は)いまだにまだモノクロの写真やドキュメンタリーを撮ってる作家さんが多かったり。

おか それがいわゆる写真作品だと思ってされてる方が多いという事ですね。

イ 写真で最も有名な韓国のある大学はドキュメンタリージャンルが有名というイメージになっています。

おか ということは大阪芸大に入られて、ある意味カルチャーショックってあったんですか。

イ ありました。韓国で写真を専攻しようと思うと絵画塾みたいに塾に通うんですね。写真学科に

入学するためにフォト講義を受けて準備をしていくんです。入試の時に、センター試験のようなものだけでなく、面接と自分の作品を持って行って、評価をもらって入学が決まるって感じです。

おか ある程度勉強してからじゃないと、そちらの学びの場には進めないという。

イ 韓国の大学に行っていないのでどのようなカリキュラムなのかよくわからないですけど、日本の大学では入って1年ぐらいは基礎的な物を繰り返して勉強するんです。全然写真を撮ったり学んだりした事がなくても入学出来て、1年きちっと基礎を学んでから自分のカメラを選ぶ過程を経て自分の作品を作るようになっていきます。

おか 大阪芸術大学はどういう大学なのか教えてくださいませんか。

イ 最初はまあ田舎だなーと思った。

おか 大学はそういう広い所が必要ですからね。次わかってますよね。大学ってどんな所ですか？って答えること、田舎で。

イ 近鉄の真志駅で降りて、そこからスクールバスで10分位走るんですけど、その途中の風景が、遠くに太陽の塔がみえるほど、畑ばかりです。

おか 大学に行行って思い出に残る事たくさんあると思うんですが。

イ 大学で1番記憶に残ったのは、研修旅行で直島や鳥取にいったこと。鳥取では日本の有名な写真家・植田正治さんの美術館に。直島行って撮影して自分なりの作品をチームで作ったりする研修が印象に残っています。それがすごく楽しくて、直島という場所をその時初めて知って、その後はまた一人で芸術祭を観に行ったりしています。

おか 大学という所でそういう事を学んで、今回作品を展示してます。ちょうど入り口ですよ、階段の横の所にある。こちらの作品はどういった作品でございましょうか。

イ 今まで私はずっと自分の内面的な世界を探っ

ていく、川内倫子さんとか山本昌男さんみたいに日常からとらえるスナップ形式で自分の内面を映すような作業ばかりしていたんですけど、そんな自分の中の世界って、人に見せた時に共感を得られないことが多い。自分が語りた事が全部語れないことと、もうちょっと社会性のある作品を作りたいと思って、ちゃんとテーマを決めて製作してみよう。せっかく外国で活動しているし、自分のナショナルリティー、母国の事も絡んで、作品にしてみたいなと思って選んだのが、韓国の伝統模様のテビョンファ（太平花）。その模様はハスをモチーフにして作られているもので、すべての事が平和で平安であるようにと意味合いが籠った天の花であります。そこでこの文様をモチーフにして作品化してみようということで、ハスを撮影し、幻想的なイメージを作りました。

おか 祈り的なものを感じますね。これが導入口と言いますか入り口に展示されてるわけですから。僕も入って来た時、この作品がドーンと展示されていて意外でした。今までのこちらで展示してる展覧会とはちょっと異質といいましょかね、こういった感じで展示をされたのがちょっとおもしろいと感じました。さて次は、1番奥の和室になりますね、障子に作品を貼りつけてる状態、こちらの作品はどういったものでしょうか

イ さっきのハスの写真は修士修了制作の作品なんですけど、こちらは日常のスナップ写真、自分の内



イ スジンさん

面を探るようなもので、常に撮影しているものです。日常の欠片を集めて壁面に散りばめるようにインスタレーションしてみました。今年2月末に金沢の国際交流サロンで2人展をする機会があった、その場所が昔のお待さんの屋敷でした。どんな風に展示をすれば良いかと考えた時に障子に写真を貼ってみたら面白いのではないかなと思って、その時初めて貼ってみました。

おか 近づいていくと日常の写真があって、そのまたギャップといましょか見た目の距離感がすごくおもしろいなと私は楽しめました。もうひとつありますね。こちらの作品は、私ものぞき込んでも拝見したんですけど、どういった作品でしょうか。

イ こちらも学部生の時に作成したものです。好きな韓国の詩がありまして、その詩は作品の下に置いてあるんですけども、詩の内容は、「人は皆、誰かにとって特別な存在になりたい。その特別な存在になるためには、その相手が自分の名を呼んでくれないと、特別な存在としてなりたない。」というもの。彼はその特別な存在を花として例えているんですね。それともうひとつ、私が強く思っている考えがあります。誰かを記憶したり記憶されたりするのは、その誰かが私の心の中に部屋を作ってそこに住みついているから記憶に残ってるんだということです。それとこの詩を融合した結果、自分の心の中にある部屋に、特別な存在であるの花を表現してみたいなと思って、すべての被写体を自分でミニチュアで制作したものです。

おか イさんの特徴が出てるんだと思います。横にちっちゃいお部屋といいましょかそういう物のそちらをご覧になっていただいてから、見ていただくといいですね。続いては井上理緒奈さんです。出身はどちらの方ですか。

井上 理緒奈さん（以下 井上） 出身は大阪で、大学は京都精華大学です。

おか 京都精華大学はどういった学校でしょうか。

井上 田舎（笑）。

おか ありがとうございます。大学はどういったところ。

井上 オープンキャンパスの行った時の第一印象がすごい自由な空気が流れてる、大学ってなんかイメージだったら先生がいて、生徒がいて、専攻の事を教えてっていう、硬いイメージだったんですけど、学校内を歩いている人が何を学んでるかよくわからない感じで、みんなホントに専門の事作ってるのかな？ っていう雰囲気はありました。それが、入りやすいというか、何をしてもいいと。学校の校舎が色々あるんですけど、校舎でないところで焼き芋を食べてたりとか、寝てたりとか。

おか 校舎じゃない所で？ 例えば、川べりとかそういう事ですか。

井上 川べりとか中庭みたいな所だったり、食堂の前のスペースで焼いてたり。

おか 井上さんはそういう事してないですよね？

井上 でも寝たりはたまにしています。

おか 寝転んだりとか。その時にこの大学は自由だなーって？

井上 そうですね

おか 大阪の人間て京都って所に特別なイメージがあるんですね。一回行ってみたらどうでした。

井上 実際行ってみたら、普通でした。今では京都の方が“実家感”が今はあります。

おか それだけ大学行ってたから自分の懐かしい場所というか、心が置ける場所になってしまったって事？

井上 それもありますし、町と山が近いので、居心地がいいというか。

おか 電車あるじゃないですか、叡山電鉄でしたっけ。あれがいいですね。特に花見のシーズンなんかとか紅葉のシーズンとか、景色すごいいいですよね。

井上 いいですね。あと学校も景色がいいんです。山の中にあるんで、学校で授業して窓を見たら。

おか 美術系の学校ですよね？ さっきから1つもそういう話出てこないんですけど、何かそういう事ってありますでしょうか。

井上 美術系の事ですか。

おか はい、美術系で。はい、結構です、ありがとうございます。大丈夫です。それでだいたいわかりましたから。そして卒業されて、この話聞いた時どうでした。

井上 嬉しい、やりたいって思いました。

おか 皆さん卒業された方々ですからね。では井上さんの作品を。ドアを開けた瞬間、この世界感が広がっているという、プロジェクターを4台使っていると話をお聞きしています。これはどういう作品なんですか？

井上 普段の生活の中ですごい心と体、意識が離れる瞬間というか、そういう感覚を作品に残したいと思って制作しています。卒業制作からシリーズで作っている、「トンネル」っていう作品で、これは1つの日常の体験からできています。私が電車に乗ってる時に、ボーっとしてる人を観察するのがすごい好きで、いつも見えています。その人は何を考えているんだろうとか、この人の意識はどこにいつているんだろうと考えてて。そう思っている瞬間にもしかして今私が見ているこの人は自分自身なんじゃないかということに気づいて。もし自分と同じ考え方の人がこの電車の中に居た時に、その人が私を見たら、今の私と同じ事を考えてて、私の事をみているという気持ちになった時に、自分は見てた側だと思っていたんですけど、その瞬間に、その自分の立場がどこかにフワッとわからなくなってしまって。その瞬間の感覚がずっと残っていて、それを今回作品として留めることを試みた作品です。

おか 独特な電車の中の空間で。例えば一人ボーッ



井上 理緒奈さん

と窓を透けるような形の方がいらっしゃった時、たまに私もそんな事思います。たぶん皆さんもそういうような経験があるのかなという気がします。実際に鏡を展示されてますよね。そういう意味あいがあるわけですか。

井上 鏡はその見てた自分と見られていた自分という領域の境目を作品の中でも鑑賞者の人にとってもらいたいと思って今回展示しています。

おか ちょっとハッとしますからね。展示室の中に入った時に鏡があって自分自身がパッと映った瞬間というのは、そこの中で、現実に戻るというか、もう一度自分に問いただすというか、まさに本当コンセプト通りにどハマリしてしまいました。ドアを開けた瞬間ハッとする映像がその中の部屋にありまして、おもしろい作品でした。続いては上田要さん。

松長 今日はお休みなんですけども。

おか 大学はどちらなんですか？

松長 上田さんも京都精華大学、先ほどの井上さんと同じです。

おか どんな大学なんですか。

松長 えーっと田舎。

おか ありがとうございます。それでは上田さんの作品を。

松長 屋外のもの、1.6ミリの鉄の立方体を空気を4気圧かけて溶接した後膨らました作品です。こういった形の板を溶接して作ったわけで

はなく、空気を入れて膨らましたという作品で、150キロくらいあります。屋内のものは凹みしてる作品です。この作り方は後ほど見てもらおうと思います。中に水を入れて、火をかけて中の水を沸騰させて、その状態で蓋をする。水蒸気をいっぱいにした状態で水をかけて、中の気体が液体に縮む体積の変化を利用して凹ませた作品です。空気の方で作った作品で、材料の所を見てもらったら鉄と空気と書いてます。そういう作品でどちら元も元の形は同じ形です。すごいダイナミックな作品です。

おか 彫刻作品といいましょかそういった作品の中でおもしろいですね。鉄と空気、日常で常に見てる物ですけども、それがこういった形に変化をするというのが2つ、中と屋外にある。触っても大丈夫ですか？

松長 触っても大丈夫です。特に外にあるものは150キロくらいありますが、丸くなってますのでちょっと押すと揺れます。簡単に、指1本で揺れるぐらい。だから鉄という概念がどっかっちゃやうな、凹んでる事とか動く事とか常識がどっか行ってしまうような、そういうおもしろい、紙も鉄も一緒やなみたいな。彼は作品を作る時にいくつも試作して、サイズを変えたりしながら。何回やっても同じように潰れるらしいです。

おか へー。

松長 私も彼に初めて聞いた時同じように彼にへーという形でお聞きしました。彼は今中学校で美術の先生やっています。

おか 生徒さんに見せてあげたいですね。こういう作品、ある種、物理学、化学とか美術以外のそういった共通する部分もありますから、おもしろい作品ですよ。続いては上田優奈さんです。出身はどちらでしょうか。

上田 出身は大阪で、大学は京都市立芸術大学です。

おか 吾郷さんと一緒ですね。どんな大学でしたか？

上田 田舎でした（笑）。

おか 入ろうかなと思ったきっかけがあると思うんですけど、どういう事で選ばれたのですか。

上田 入る当初はぜんぜん作家とか知らないの単に家から近いのと学費が安いというので選んでしまった。大学までバイクで30分だったので終電とか気にせず制作できてとても便利だったんです。

おか 周りの方は何学部？

上田 版画です。

おか 版画の方。お互いが切磋琢磨して刺激になってって感じなんですか。

上田 それは結構ありますね。作ってる時は結構シーンとしてるんですけど、休憩のときは研究所に集まって結構ダラダラとしゃべってます。隣どうして摺ってるのに、一晩中シーンとしてることもありあます。京芸は木版画と銅版画とリトグラフとシルクスクリーンの4つの版種で摺っています。

おか それぞれ興味の持ち方は違うと思うんですけども、今現在やっている手法は。

上田 シルクスクリーンです。入るまではシルクスクリーンを知らなくて、初めてその最初に4つの版種を試せるんですけど、摺ってみて、1番自分が楽しいなって思った。

おか 例えばこう版画っていうのは版を摺ってパッと上げた時の紙に載るその色の質感であるとか、そういったものが1番しっくりきたという事ですか。

上田 感動が1番大きかった、初めての経験で。

おか 大学に行ったら色んな事があると思うんですけど。学園祭であるとか、大学の時代で思い出に残っている事とかは。それがもちろん単車通学している時にこんな事があったとか。

上田 夜中に制作をしていて、制作終わったら雪がすごい降ってて、無理やり雪が降ってるのにバイクで帰ろうとしたら滑ってこけました。痛あって起きたらバイクがエンジンからなくなってしまって、駅まで押して帰ったという1番しんどい思い出です。

おか わろて話す話ちゃいますよ、いわゆる一種の事故みたいなもん。その単車、今は。

上田 元気です。

おか 元気ですっておもしろいですね。でもその単車があったから遅くまで制作ができたし、それで大学というものでいわゆる美術を深く知ることができたところもありますよね。そんな事故をしてしまった上田さんの作品ですけども、実際に見ていただけます。こちらの作品は、まずブルーの。

上田 基本的に自分の身の周りにあるような日常的な物をシルクスクリーンで制作しています。シルクスクリーンを始めたきっかけはすごいきれいに摺れるなという感想だったんですけど、摺ってるうちにその摺り味がすごい無機質だなーと思って、それがだんだん疑問に思えてきました。無機質になってしまうのを、自分が日常的な物を摺る時に無機質にならないように、シルクで摺り方を変えて作成しています。

おか 基本的な事聞かもしれないですけど、これでだいたい何回摺るんですか。

上田 これは2版だけなんです。2色だけで摺っています。

おか ルービックキューブの作品なんて色がたくさんありますよね。

上田 もともとは3色なんですけどそれを何回も上から摺ったり重ねています。近づいて観ていただきたいんですけど、これ色が粒みたいになってます。

おか 色が。なるほど。これはシルクっていう手法の中でやるとしたら何回も摺らないとこういう

事にならない？

上田 普通に摺ったらただの1色になってしまうので、何回も何回も。

おか なんて言うんでしょうかね、スリガラスのボコボコとなったような、ここから実際に見ますと線がこうズートあります。これはどのような摺り方で。

上田 もともとただのドットなんですけど、ドットを何回も重ねることによって、丸がつながってきて線にみえるんです。

おか こればけてるんじゃないですよ。要するに重ねている部分の中で表現されている1つの風景というか、こういう版画の中の。

上田 パッと見やったらばけてる写真になるので。

おか これはわれわれが日常見ているもとは、なんかちょっと違うような、見方がするというか、おもしろいですね。さあ、続いて行きましょう。続いては尾崎友哉さん、よろしくお願いします。尾崎さん出身の方はどちらになるでしょうか？

尾崎 友哉さん（以下 尾崎） 明石市出身で学校はビジュアルアーツ専門学校です。

おか 大阪のところですね。明石からビジュアルアーツさん、どういう流れで。

尾崎 僕は鉄道が好きでそれで写真撮ってたんですけど、写真を習いたいなと思って入りました。

おか 僕も子供の頃から電車の運転手にはなりたかったんですよ。男の子はすごい電車が好きです



上田 優奈さん

からね。込み入った線路とかね、電車が走ってくるとか。最初は鉄道から入ったわけですね。そこから実際にビジュアルアーツに行こうとした、例えばこれがより一層電車を綺麗に撮りたいとか発想なのか、それとも写真を学んでなにかアーティストになりたいというどちらの方を。

尾崎 両方。

おか アーティストになって電車も撮ればいいし。実際学校はどんな学校だったんですか。

尾崎 2年間しか行かないんで結構スケジュール、パンパンでした

おか いやーそんなんいっぺん言うてみたいわ、俺。スケジュールパンパンでしたって。どういったカリキュラムなんですか。

尾崎 外行って町を撮ったり、スタジオで撮影したりとか、暗室の授業とかもあって。

おか 真っ暗ですよ、写真というのは。僕昔にアートをプロデュースさせていただいた時に、ビジュアルアーツ専門学校さんに協賛とかそういった所に付いていただいて。授業でも、私そちらの方でもちょっとお話させていただきました。明るいですよ。皆さん本当に。学校の場所も中心地になりますよね。日曜日なんか学校休みですよ。鉄道撮りに行ったりしてたんですか。

尾崎 そうですね。

おか 例えば、今まで高校時代撮り鉄として撮ってた時とビジュアルアーツ卒業してからいわゆる鉄道を撮る、撮り方って大きく何か変わりました？

尾崎 鉄道って商業寄りなんですけど、ビジュアルアーツは作家よりの考え方で、考え方が違うなあと。

おか 例えば、鉄道撮りますよね、電車とか。作家よりというのと撮り鉄よりっていうのは何か違う所があるんですか。撮り鉄っていうのは電車が好きだからそれを撮るという事ですよ。アーティストになった場合作家よりになるとどういった事

が違います。

尾崎 もう完全に雑誌で撮るような写真か、自己満足で撮る写真の違いです

おか 見せ方をやっぱり考える？

尾崎 はい。そうです。

おか それでどこか遠くに遠征されたりとかしたんですか。

尾崎 北海道から九州。

おか どこかおすすめの所ってどういった所がありますでしょうか。

尾崎 大井川鉄道。

おか 早いですね一出てくるのが。どのへんがいいですか。

尾崎 SLも走ってて、私鉄の中古の車両とかが走ってますし、自然もいっぱいありますし。

おか ひょっとしたらこのお話を聞いててSLというお話がチラッと出てきましたよね。今回展示してる作品なんかもそうなんですけど、見ていただきましょう。これなんですよ。モノクロ写真。これは実際に昔から撮られているんですか。

尾崎 学校入ってからですね。

おか もともとカラーですと撮られて。モノクロ写真でカラーと何か圧倒的に違うというか、そういう物ってなんかありますか？

尾崎 白と黒しかないんで、曖昧で不安定な写り方になって結構おもしろくなるんですよ。

おか 僕は今あなたがすごくおもしろいです(笑)。ちょっと見た印象なんですけども、昭和の写真なのかと思うぐらいすごくノスタルジックなイメージというかそういうのが頭に飛び込んできたんですけど、どうなんですか。町の風景ってひょっとして平成も昭和も変わらないいかなという気がするんですけど、どういった事でしょう。

尾崎 勘で生きてる人間なんでいいなって思った瞬間をずっと切り続けてこうなりました。

おか だいたい何枚ぐらい撮られたんですか。



尾崎 友哉さん

尾崎 1年間でフィルム100本ぐらいは撮りました。

おか すごいなあ、主に明石、大阪ですか。

尾崎 神戸、大阪とか、東京の写真とかもあります。

おか でもやっぱり、実際にこういう風に写真を撮り出したら先ほども言いましたように、自分の趣味の写真も変わってきたという。こちらの作品、こちら大きなプリントの作品になります。奥の作品なんか幼稚園の子供ですかね。子どもたちがワイワイ言ってる写真とか。大きな表現、プリントとしての表現とああいっただ形の小さいプリントの表現、なにかこだわりがあるんですか。

尾崎 こういった町のストリートスナップっていう写真はメリハリが大事になるんですよ。で、お客さんが入るなら大きく引き伸ばした方がいいかなーと思って。

おか 幼稚園の風景なんか見てるともおもしろくて、表現的にも明るくていいなと思って。写真ということで、皆さま楽しんでいただけたらいいなと思います。では最後は山田勇魚さんです。よろしくお願いします。出身はどちらですか。

山田 勇魚（以下 山田） 出身は神奈川県で、大学は東京芸術大学です。

おか 神奈川県で、東京芸術大学ですね。私が実を言いますとネットを検索しておりまして、ちょうどどなたか推薦をしてくださいと依頼がきたときに、パッと山田さんの作品が目にとまりまして

非常に興味がわいたというのが、実は言うとして生で観たいとそういうような印象を受けた作品です。後でその作品のお話を伺うとして、東京芸大というところで、どんな学校なんですか。

山田 上野公園って皆さんご存知ですか。動物園があって、最近ですと若冲展、西洋美術館、ルコルビジェ建築物が世界遺産になったりとか。あそこの端っこなんです。住所でいうと台東区上野公園12-8とって上野公園の中にあります。

おか すごい環境いいですね。考えたら美術館は近所にありますし、芸術大学にしたら持ってこいの場所じゃないですか。実際に大学から美術館に行ったりはされるんですか。

山田 メンバースHIPという制度がありまして、芸大の人はタダで入れる展示もあります。

おか よその大学と違うよって所はありますか。

山田 実は多摩美術大学に1年間だけ通っていてその後東京芸大に入りました。私立と公立とやっぱり学費が違います。4分の1ぐらいになります。

おか 学び場として違いますか。

山田 そうですね、多摩との比較になってしまうんですけど、僕はデザイン科という場所において東京芸大のデザイン科ってもうデザイン科しかないんです。グラフィックデザインとかイラストレーターとかプロダクトとか空間とかそういう区切りがないんですね。そうなる必然的に生徒も雑多な事を学んでくる人たちが多くいます。そうなると同じ教室の中に45、6人しかいないんですけど、皆それぞれのジャンルで活躍する人が同じ課題をやるんです。その課題が結構ざっくりしていて、例えば「植物園をテーマに自分が考えたデザインを提案しろ」となると、グラフィック系をやりたいなと思ってる人はポスターを作ったりとか、空間デザインをやりたいう人は模型を作って植物園を作ったりとか、自分のとこに引っ張って行ってそれを出すっていう訓練をずっと4年間

していきんですけど。そういう意味で他のジャンルのデザインを学んでる人の近くで研究できるっていうのは他と違うかもしれないです。

おか 実際に山田さんはどういった物をお作りになられたんですか、大学時代は。

山田 そうですね、大学時代は空間系、修士でも空間設計デザインというものをやっていたんですけども、最終的にはこの後ご覧になると思うんですけども、現代アートよりのデザインを作るようになってきました。

おか それは何かきっかけはあったりと思うんですけども、本当に卒業生の皆さんの作品のクオリティが高いという、すごい感じるんですけど、そのへんのところというのは、どうですか。

山田 そうですね。在学している身としてはあの上の方の人のレベルも、何とも言えないんですけど、なんかこれで芸大卒業していいのかというようなものも出したりもする。ただ入試が結構厳しいので。僕も4浪して入ってて。

おか えっ、ちょっと美術系ってそんな浪人するんですか？

山田 僕があんまり優秀ではなかったんで。

おか あ〜推薦せんといったら良かった。えー、4浪？ってことは予備校ってあるんですか、美術の。

山田 美術予備校っていうのがこちらの方でもあると思うんですけど、そういう所で学びつつ、バイト代で学費ためつつ。

おか 浪人4年、大学4年、大学院2年に変化というのはありますでしょうか。

山田 そうですね、最初の浪人の4年間は変化ないんですけど、だんだん実力がついてきて、どんどん上達していく喜びというのはあります。大学では1年、2年、3年、4年と全部カリキュラムも違いますし、あと社会との関わりがだんだん深くなっていく。最初のは学生として内側で課題をこなしていくという感じなんですけど3年なって

くると自作する課題とか、例えば浅草の商店街とコラボレーションしてそこのお店を紹介するような作品を作る。採用されれば実際にそのお店が使ったり。

おか グラフィックデザインポスターであるとか、というのをご提案して採用されればそのまま。もちろん学生なので契約金とかギャラみたいなのはいらぬんですね。

山田 頂く場合もあります。僕はそういうのなかったですけど。

おか そうなったらものすごい高い眼鏡かけてたと思いますけど。院の生活というのは大学とは違うんですね。

山田 院になると自分の研究課題を主にやっているとこの形になります。今まで出された課題をこなしていったのが、自分で課題を作ってやっていく、研究していくっていうのが院です。

おか そんな山田さんなんですけど、後ろの作品のご説明お願いいたします。

山田 こちらはクジラをかたどった作品の中にそれぞれ世界が入っているんですけど、タイトルが「輪廻」といまして、六道輪廻といってなかなか知らないかもしれませんが、仏教の中の世界観で簡単に言うと生まれ変わりの話です。生前の行いによって生まれ変わる世界が地獄っぽい所だったり、天国っぽい所だったり、動物の世界であったり、そういう話があるんですけど、それをそれぞれクジラの体内の世界観で。例えば「天道」であったら一番右端の雲の上みたいなのをしてあったりとか。お金の困って2個売ってしまったので、6つのうち4つしかないんですけど。

おか でもいいじゃないですか、2個売れちゃったって事は。6点あるものが4点になった、これだんだん展示増える事に1個、1個減っていくってことですよね。これすごい技術的に難しいと思うんですけど。雲みたいなかたち、あれ綿ですかね。

山田 はい、そうです。綿を中に入れてます。色々実験を繰り返してこの形にしています。

おか 気泡もすごい細かいじゃないですか。これかなり苦労したんじゃないですか。

山田 そうですね、他のやつは海底のイメージで作っているんです、下が砂浜みたいな。砂の混ぜ具合とかで気泡の量も変わってくるんで、それでちょっと調整したりとか。色々実験、失敗の繰り返しで作っております。

おか これの元々の発想というのはクジラですよ。どういところから。

山田 僕の名前は山田勇魚っていうんですけど勇気の「勇」に「魚」と書くんですが、昔の言葉で「クジラ」って意味なんです。だから逆に避けてんですけど、修了制作ってことで学生最後の作品は名前にちなんだ物にしようって事でクジラにしました。特に今回のテーマとしては輪廻転生というのは、あんまり別に宗教家ではないんですけど。テーマとしては哺乳類なのに海に戻って陸地に上がったと死んじゃうっていう、それが輪廻の輪から抜け出せない魂の器みたいな、そういう話から持ってきた。

おか 実際は円になってるんですね、6体が。今回の展示は4体なんでこうなってる。次の作品の写真です。けしてこれは山田さんの部屋ではありません。もう1枚みていただいたらわかりますかね。肉や唇やら色々な物がありますけども、すご



山田 勇魚さん

いですね。これはどういう作品ですか。

山田 これはまた別の考え方を元にした作品なんですけども、学部卒業の時の作品ですね。「九十九神の部屋」というタイトルで。九十九神というのは、例えば水木しげるの妖怪とかをイメージしてただくといいいんですけど、一反木綿とかめりかべとか物に宿る魂が実体化して妖怪になる、昔の日本のアニメとかそんな感じなんですけれども。例えば部屋が丸ごと九十九神、妖怪になったらどんな部屋だろうということで、冷蔵庫だったら消化器官で、肺とか心臓はないんですけど。あと時計でしたら心臓でチクタクとビートを刻む感じで作ってみたり。一応その道具の由来という機能が合わせて、身体の一部に例えて作ってみた作品です。

おか この和室っていうのが展示室だと聞いた時にもうコレだと思ったんじゃないですか。

山田 そうですね。これはハマるかなと思って。

おか エラはまりですよ、コレ本当に。皆さん引き出しとか全部見ました？引き出しとか。エライ事になってますよ。これ大変やったでしょ、制作するの。また物見つけないといけななし。

山田 熱海のつづれた旅館からもらってきたんですけど、取ってくる時は冷蔵庫にツタが絡まっていたりとか物々しい感じだったんですよ。

おか あれ実際に動くんですか。

山田 冷蔵庫は動きます。動かすと冷気がちょうど口のところから「ぶわっ」と。

おか それはそれでおもしろいんですけどね。是非とも皆さんこの後ご覧下さい。これで6名プラス1名の7名ですね、作品紹介、ならびに大学紹介をさせていただいたんですけど、皆さま方にせっかく来て頂きましたので色々お話を伺ってみたいと思います。アーティストを知るという事で、今回このテーマをひとつ設けさせていただきます。「影響を受けた人、物、事。」これだけは自分にとって影響を受けたのか。私の場合は住之江公園、も

のすごくコンテンポラリーな公園なんですよ、滑り台が定期的ような滑り台で赤とかオレンジでタイルを一直線に滑っていくような、現代美術の公園みたいな所、そこで幼いころを過ごしまして。そういった所の影響がありまして、現代美術が好きになったりとかあるんですけど、それぞれアーティストの方が影響を受けた人、物、事、このうちの1つでいいんで、書いて頂いて発表していただく。それでは吾郷さんお願いします。

吾郷 「インターネット」ですね。小学校1年生の時にパソコンがやってきて、その時からチャットなどに10年以上親しんできました。慣れ親しんでいるものとしてやっぱりパソコンかなと。今の作品のテーマというか自画像を描く時にデジタルとアナログの間にコミュニケーションツールとしてSNSがあるのかな、と思って。今の作品のテーマがセルフイー。やっぱり自分で写真を撮る行為というのはセルフイー。鏡を見ると写真を撮りたくなるから、そういうところに還元したいですね。

おか なるほど。それではイさんはいかがです。

イ 「母」ですね写真とは関係ないけれども、母方の親戚はみんな手先が器用。母も美術系の大学に入っていました。それで小さい頃から美術と接する機会は多かったのかなと。

おか お母さんは美術で大学に行くのをなんと。
イ 写真で大学に行くことには大反対でしたね。小さい頃はかわいらしいの範囲でよかったけれども、写真で生きていくには大変だし、固定観念みたいなものがあり、戦場カメラマンとか記者とか、女の子がなるにはちょっと危ないってのがあったみたいです。

おか 親心ですけどね。さて次、井上さん。

井上 「保育園」ですね。私のお母さんが小学校1年生の時に保育園を始めたんですが、保育園に住んでいる時期があり、いつも子どもたちが生活の

中にいました。1つ目の影響は、自分のプライベートの状況に知らない子供たちがたくさんいて、まだ小学校1年生くらいの時に知らない子供が隣にすることがとても嫌でした。その時期から人を人として見ないというか、その状況を遠目から見ると自分がいて、人間を観るというよりも、ものを観察しているような気分になるっていうのが続いているんです。もう1つ目が音。保育園とかすごいがやがやしてて、それに耳を傾けていると、ちょっと変になりそうになる。あと8人兄弟なんですけど、生まれた時から兄弟が声があったり、小学校になっても子どもの声がするといった状況で、すごく音を選ぶようになった。いい面でいうと自分が聞きたい音を無意識の中で聴けるようになったが、悪い面でいうとぼーっとしやすくなったというか、自分が周りから遮断する瞬間が増えた。聴きたい音だけを聴こうという感覚が、保育園で長い間住んでたことで、自分の中に根付いていて、作品を作る時もそういう感覚が続いているので、そういう作品になっているのはすごく感じます。

おか 孤独であるとか。孤立といったほうがいいのか。ようさんおるところのほうがいいんだけど、遠くから見ておきたいという気持ちもあったり。

井上 それはすごくあります。大勢の中に入ろうと思えば入り込めるんですけども、それをわざと入らないでいたい気持ちというか、自分の領域の中から見ていたいという感覚がありました。

おか 面白いですね。それが自分の作品にどのように影響していくか、自分で今回改めて見てみて、何か感じましたか。

井上 もともと音楽の方とパフォーマンスをしていたけれども、映像だけを作り始めたのは卒業間際で、パフォーマンスはやった瞬間にどんどん消えて更新されていくけれども、展示するものは今まで流してたようなものをとどめておくという

ことなので、それを繰り返していくうちに、今まで自分がどういう環境いたかというのをさらに考えるようになりました。そこから作品を作ることと今まで知らなかった自分を知れるというかそういう気持ちになりますね。

おか ありがとうございます。では次、上田さん。

上田 「幼馴染」ですね。小学校のときからずっと一緒にいるんですけど、幼馴染も絵が好きで、一緒に絵を描いていました。幼馴染のほうが絵がうまかったので、勝ちたいという思いが強かったです。ただ、受験の時は勝ちたいという気持ちが強かったけれど、制作を進めるにあたっていろんな人と出会ってそこからまた新しい目標ができていったという感じです。

おか 間違いなく影響を受けていますね。それでは次に尾崎さん。

尾崎 「大阪」です。街で写真を撮っているときに大阪ってとてもおもしろいんですよね。明石とは違う。街で交わされる会話とか。東京都比べると大阪は賑やかで人懐っこい感じ。大阪にいると街を観る感覚、観察力というのが高くなりますね。尼崎は商店街が賑やかでやっぱりおもしろいですね。

おか ありがとうございます。次、山田さん。

山田 「ゴミ」ですね。自分は結構もったいないと思うタイプで、人よりものを捨てられません。まだ使えるのにもったいないと思ってしまいます。それがあの部屋の発想につながりました。そういう気持ちを昇華できないかなと思っているときに日本古来のものに魂が宿るという考え方を学びました。ちゃんと供養してから捨てるというのを学びました。

おか それでは次、普段使っているもの、アトリエにあるもの。普段どのように制作しているのかというところを聞いてみたいと思います。では吾郷さんお願いします。

吾郷 油画専攻だけれども、筆が大嫌いで、ほぼペンですね。隣の部屋の作品は修正ペンで、公開制作の作品はガラス用のペンで描いています。描きにくいんですけど、ガラス面に白く細い線が描きたくていろいろ試してみたが修正ペンだなと。

イ iPad です。制作の段階では使わないんですけども、自分が作った作品をポートフォリオ代わりにiPadに置いて持ち歩いています。

井上 日記です。ぼーっとした瞬間を忘れないようにするための日記です。人生が10だとしたら7くらいはぼーっとしてる。ぼーっとしている時に何も考えていないわけではなくて私はいまぼーっとしているが、世界の皆さんは人生の何割くらいぼーっとしてるんだろうという疑問が芽生えます。どこからがぼーっとしてて、どこからが何かを考えているという境目があるのかなと思います。

上田 PC (パソコン) ですね。版画というと木版とか古典的に削っていると思われがちだが、自分は全部PCで印刷しています。そういう意味でPCですね。

尾崎 フィルムカメラですね。キャノン派です。デジタルカメラも全部キャノン。学校とかで使ったが全然使用感が違います。

山田 電動ドリルなどに使うビットです。クジラの表面などを削るのに使います。最初は表面がガサガサしているので、これにヤスリを巻いて削ります。市販のものだとどうしても限界が来てしまうので、道具も自作しています。

おか ちなみにクジラ1頭制作するのにどれくらいかかるんですか。

山田 削りの段階に入ってから、頑張ると1日できるが、合間の時間でしていくと1週間くらいかかります。

ー上田要さんの制作風景の動画を流すー

おか 最後にアーティストとしてやっていくのに大切にしたいことを教えてください。

吾郷 あと2年間アカデミックな場所で絵画の勉強ができるので、つながりや時間を大切にしたいです。

イ 自分が作りたいと思うものを作り続けていくことです。売れる売れないで評価されるのは嫌。売るために表現しているわけではないので、自分が表現したいものを常に続けていくことを大切にしていきたい。

井上 日常生活と作品、自分自身と作品とを切り離さないということを大切にしたい。日常生活の中で制作することがモチベーションになります。

上田 体力ですね。これから仕事と両立していくのに、最近体力が落ちてきていると感じます。版を洗うことも前まで楽だったのに、最近しんどくなってきました。

尾崎 いろんなことを知っていくことが大切だと思っています。この展覧会でいろんな人の表現をみて、考え方も変わったなと思うことがありました。

山田 まずはインプットすること。制作するためにお金を稼ぐと、お金を稼ぐことと制作することで精一杯でなかなか自分の中にインプットする時間がない。助手をやるようになってとても感じる。あとはやめないこと、続けていくことですね。同級生なんかでもやめてしまう人が多いが、細々でも続けていきたい。

おか ビートたけしさんも同じようなこと言っておられましたね。何かを10年以上続けることは難しいと。芸人とアーティストというのは似ていると思っている。自分をいかに表現するかということに答えはないが過程が大切です。今回作品をみて感動しました。今回の作家の方は伸びを感じる作品ばかりでした。またみなさんの作品に出会えることを楽しみにしています。



フライヤー